

今、改めてブラウンとレヴィンソンのポライトネス理論を考える

ー普遍性と方法論、敬語使用、社会学の観点からー

企画責任者・指定討論者・進行：宇佐美まゆみ(東京外国語大学)

話題提供者 1：宇佐美まゆみ(東京外国語大学)

話題提供者 2：山岡政紀(創価大学)・小野正樹(筑波大学)

話題提供者 3：阪本俊生(南山大学)

1. このワークショップの趣旨

ブラウンとレヴィンソン(以降、B&L)の「ポライトネス理論(1978, 1987)」が初めて発表されてから早半世紀が過ぎようとしている。この理論は関連諸分野に多大な影響を与えたことは周知の事実であり、今では最も完成度の高い「ポライトネスの普遍理論」として確固たる地位を得ていることは、間違いないだろう。2024年の今もいずれの研究分野においてもB&Lの理論は引用され続け、特に「言語研究分野」では、この理論はポライトネス理論の基本となっていると言っても過言ではない。

ただ1990年代初頭には、多角的側面からなるこの壮大な「社会理論」を、その言語的側面からのみ捉えて誤解し、「個別言語の敬語の原則」をうまく説明できないというような誤解に基づく批判や、ポライトネス・ストラテジーの「選択のメカニズム」は普遍的であるという主張を、文化の多様性や文化的価値観の違いを考慮していないということと短絡的に同一視するなど、的を射ない批判もあった。

この理論を「言語の丁寧さの理論」と捉えるような誤解が生じる理由の一つに、B&Lが、その著書(1987)の中で、かなりの紙幅を割いて具体的な言語的ポライトネス・ストラテジーを挙げていることもあるだろう。ポジティブ・ポライトネス・ストラテジー(15)、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー(10)、オフレコード・ストラテジー(15)のようにストラテジーに番号までつけて、それぞれ実際に収集した膨大な言語データの中から、文脈を示した上で具体的な言語表現例を豊富に挙げていることも影響しているだろう。つまり、「言語表現」の例が豊富に挙げられているだけに、この理論を「言語の丁寧さ」の理論だと捉えてしまいがちになるのである。また、言語研究分野におけるこの理論の紹介などにおいて、とかくその言語ストラテジーの部分がクローズアップされる形になっていることもあるだろう。コンテキストに応じたポライトネスの具体的な言語ストラテジーが提示されていることは、円滑なコミュニケーションの言語教育的観点からも実用的観点からも有用であるため、どうしてもその部分が中心的に取り上げられてきた。

個別言語の敬語のルールが説明できないことを根拠にこの理論の普遍性を否定するという噛み合わない議論が生じたまま、2000年代に入る頃になると、この理論の普遍性を批判していた研究者の多くは、「ポライトネスの普遍性」の問題から離れ、個別言語の記述的研究へと回帰していった。一方、普遍理論追究に意義を見出す研究者は引き続き理論研究を続けるという形で2極化していった。

ただ、2024年現在においても、1990年代と同様に、多角的側面からなるこの壮大な理論を、その一面からのみ捉えて誤解し、文化の違いを考慮していないという指摘や、「個別言語の敬語の原則」をうまく説明できないというように誤解したまま、この理論を批判する声も未だに聞かれることもある。その理由の一つに、B&Lが、その著書(1987)の中で、かなりの紙幅を割いて具体的な言語的ポライトネス・ストラテジーを、ポジティブ・ポライトネス・ストラテジー(15)、ネガティブ・ポライトネス・ストラテジー(10)、オフレコード・ストラテジー(15)のようにあげて、それぞれ実際に収集した膨大なデータの中から文脈を示した上で、具体的な言語表現の例をあげていることが影響していると言ってもいいだろう。つまり、ポライトネスの具体的な表現例が豊富に挙げられているだけに、この理論を「言語の丁寧さ」の理論だと捉えてしまいがちになるのである。

しかし、B&Lの理論を真に理解するには、この理論を現代の言語的観点からのみ捉えて、様々な個別言語の敬語のルールを持ち出して理論の普遍性に疑義を呈したり、「文化の多様性」を根拠に、短絡的にその「普遍性」

を否定することはナンセンスである。また、B&Lの主張には、一般に最もよく知られている豊富な言語的ポライトネス・ストラテジーの例示の部分以外にも、これまでほとんど取り上げられてこなかった様々な観点がある（宇佐美，2024）。

本ワークショップでは、3名のパネリストが、B&Lのポライトネス理論に関して、これまで十分に検討されてきたとは言えないいくつかの観点に焦点を当て、①「普遍理論」の捉え方とその研究方法、②「敬語使用の変化」、③「フェイス」の社会学という、これまでと少し異なる観点から、B&Lのポライトネス理論を改めて考える。3名が焦点化する点は多様だ。ただ、そのことによって、この理論の視野の広さと洞察の深さ、その意義と限界、発展、応用の可能性が示される。参加者の方々も、それぞれの分野や興味の観点から、このワークショップで取り上げた点の何かについて考える。

2. 話題提供

以下に3名の話題提供者の論考を記す。

話題提供 1. 言語社会心理学・談話研究の観点から B&L のポライトネス理論の普遍性と方法論について考える。

社会的相互作用研究の新しい方法論－記述的アプローチと実証的方法論の融合は機能しているか－

宇佐美まゆみ（東京外国語大学）

1. はじめに

実際の文化人類学のフィールドワークに基づいた観察から気づいた最も興味深い点は、「全く異なる言語や文化背景を持つ人々の使用する言語表現が、詳細に比較してみると、驚くほど類似している」点であることを、繰り返し論じている。その「類似性」は、「高度に合理的で効率的なコミュニケーション様式から特定の「動機」をもって逸脱する」という点に見られるとし、その言語文化の違いを超えた「共通性」をうまく説明できる唯一の理論体系を「ポライトネス理論」と名付けた。その「共通性」は、当時、言語学において主流を占めていたチョムスキー流の言語観、言語の「普遍性」の捉え方への強いアンチテーゼともなっていた。B&Lは、この理論の主要な目的として、①多様な文化において、ポライトネス理論の観点から何が最も顕著な現象であるかを記述し説明すること、②人間の相互作用における「普遍性」の追究とその「一般化」のために、これまでにない「新しい方法」を提案することという2点を挙げていた。本発表では、彼らの理論の中で大きな位置を占める「ポライトネス・ストラテジーの具体例の記述は、伝統的人類学における方法のように、現象を観察し記述することに留まるのではなく、他の観察者もその立場になれば、同様の観察をするだろうという前提に立つものであり、研究対象によっては、新しい実証的研究の方法として適用されるべきである」という主張を検証する。そしてその主張を実践した彼らの「モデル（理論）」の問題点と意義を再検証するとともに、個別事象を汎文化的に説明することを可能にした「フェイス侵害度見積もりの公式」によって、この理論が、応用実証科学として工学分野における対話知能学などにおいても適用、検証することを可能にした現状を紹介しつつ、約半世紀を経たB&Lの理論の「新しい方法論」の成果とその意義と問題点を検証する。

2. ブラウンとレヴィンソンの方法論の革新性

ブラウンとレヴィンソンのポライトネス理論は、関連諸分野に多大なる影響を与えたが、ワークショップの趣旨にも記したように、その「方法論の革新性」については、これまでほとんど論じられたことがなかった。しかし、宇佐美（2024）にガンパーズの評価がまとめられているので、それを元に論じたい。

ガンパーズは、チョムスキー（Noam Chomsky）が牽引した「言語の自律性」を標榜する「生成文法」が言語学の主流を占めていた1970年代初頭に、生成文法的アプローチへのアンチテーゼとして「言語は、社会から切り離しては扱えない」ことを主張し、ハイムズ（Dell Hymes）らと共に「社会言語学」を提唱した社会言語学の創設者の一人である。そのため、「言語学は社会の中における言語を扱うべきである」という自らの主張を

実証することにもつながる B&L の理論が示唆する新しい方向性を歓迎していることがよくわかる。

B&L のポライトネス理論は、人間の相互作用に関わる普遍原理であるとともに、その本質によって、言語に反映される現象でもある。しかし、何がポライトネスであるかの解釈は、集団、状況、個人などによって異なる。しかし、もし、このような文化の「多様性」と、それにもかかわらず「繰り返し現れるパターン（普遍性）」の両方を説明する「文法的規則性」や「社会的規則性」を見つけることができれば、人間言語の本質が社会的なものであるということを主張するだけでなく、「実際に例証する方向」に大きな一歩を踏み出すことになる。ガンパーズは、B & L の理論が注目を集めた理由の一つは、「抽象的な理論的枠組み」、すなわち、「フェイス侵害度見積もりの公式 ($W_x = D(S,H) + P(H,S) + R_x$)」が提案されており、それが多くの言語および文化のデータを説明するものであり、かつ、独立した実験を通して検証可能な「予測」を生み出すということであり、いくつかの実験は既になされているという点であると評価する。

つまり、ガンパーズは、特に、生成文法で援用されていた「研究者が創作した文」を対象として、その文の「正しさ」を直観で判断するような方法を暗に批判し、例証できる「創作ではない実際のデータ」に基づき、かつ、「実験などによって検証可能な理論」の構築が言語学において必須であると認識していたが、B&L の理論がまさにそれを実現したと高く評価している。

さらに、上にまとめたような「一般的な重要性」に加えて、B&L は、言語学、社会言語学の 1987 年当時の最新の関心事に関連する「理論上」および、「方法論上」の多くの主張を展開しているとする。B&L がまとめた「ポライトネスの諸原理」は、生成文法研究者が主張する「普遍性」と同等の「言語的普遍性」を表しているが、これらの「普遍性」を導き出す「方法」が、当時主流だった生成文法研究の方法とは、大きく異なるとする。

文法研究者たちは、人間の精神構造についての仮説としての「抽象的ルール」を、「研究者が創作した文」の「正しさ」を直観で判断するような方法か、系統的な「データ誘発手法」に基づいた実験・調査におけるインフォーマントの反応に基づいて導き出そうとした。それに対して、B&L は、「実験」という形ではなく、「一定の状況下における実際のやりとり (conversational exchange) の録音データ（一次資料）」を根拠とし、加えて、「実証的に追試可能」なモデルも提唱することによって、「談話と相互作用の普遍性」について一般化を行った。その結果、実験とは異なる観察などの質的データに基づきながらも、他の研究者による「検証」を可能にするという「実証科学の基本」を満たす形で「ポライトネスを一般化する方法」を示したのである。

B&L の理論においては、状況に応じた会話のやりとりをデータとしつつ、経験的に検証可能な談話と相互作用の普遍原則としての「フェイス侵害度見積もりの公式」を参照して結果の「一般化」を行うことができる。そうすることによって、B&L は、新しい種類のデータを用いながらも、同時に、社会人類学、談話分析、そして、統語論、語用論においてそれぞれ長い伝統を持つ研究方法を統合することができたのである」(B&L 1987: xiii) とガンパーズはまとめる。

3. 「フェイス侵害度見積もりの公式」の意義

上にまとめたように、B&L の方法論の革新性は、「一定の状況下における実際のやりとり (conversational exchange) の録音データ（一次資料）」を根拠としつつ、「実証的に追試可能」なモデルも提唱することによって、「談話と相互作用の普遍性」についての一般化を可能にした点である。中でも、この理論に最も関心を示したと言ってもよい言語学分野や、B&L が帰属し最も影響を与えたかった社会学、文化人類学、特に、記述的方法論を中心的に用いる分野、下位分野において、「フェイス侵害度見積もりの公式」のような「モデル」というものは、あまり関心を示されなかった。一方、同じ言語学の中でも、生成文法のように、文の正否を「言語的直観」で判断する形で検証したり、「実証的に追試可能なモデル」というと、条件を単純化した限定的な環境で文法的正しさを検証する実験・調査がイメージされる傾向にあった。壮大な B&L の理論は、相互作用の実際のデータ（一次資料）を豊富に例示するが、それを記述的に分析するにとどまらず、実証的に追試・検証が可能な「フェイス侵害度見積もりの公式」というモデルを提出したことが、画期的ことと考えている。現象を丁寧に記述した研究や、追試・検証が可能なモデルを提出するという研究は、それぞれ皆無ではない。しかし、その両方を結び付けた形で理論に組み込んだ点が、これまでにない方法であり画期的である。発表では、相互作用研究の新しい方法論とその意義、発展性、AI 研究との協働について論じる。

【参考文献】

Brown, P. and S. Levinson (1987) *Politeness: Some universals in language usage*, Cambridge University Press.

宇佐美まゆみ(2024). ポライトネス理論：発話行為から談話へ 大修館書店.

話題提供 2. 日本語学の観点から「敬語使用の変化」をポライトネス・ストラテジーとして考える.

日本語におけるポライトネス・ストラテジーとしての敬語使用の変化

山岡政紀 (創価大学)・小野正樹 (筑波大学)

1. はじめに

Brown & Levinson(1987)のポライトネス理論(以下、B&L)は話者と聴者の対面相互交流における対人関係調整機能現象を記述した理論であり、社会学と言語学が融合した学際的理論とされているが、その鍵概念であるフェイス(face)は人々のコミュニケーションにおける対人的欲求を一般化したもので、それゆえに普遍性を志向し、かつ社会学的性格が強い。即ち、ポライトネスという社会的事象がどのような言語現象として現れるかを探究してきたのが、言語学の語用理論としてのポライトネス研究と言える。本発表では、具体的な言語現象として敬語の運用について取り上げたい。

日本語の敬語をB&Lのポライトネス理論の観点から見ると、上下関係における上位者に対して不可侵領域を守り、距離を置こうとするネガティブ・ポライトネスが言語表現として慣習化したものというのが一般的な理解である。しかし、日本語の敬語には素材敬語と対者敬語の区分があり、聴者に対して働きかける対者敬語はある種のネガティブ・ポライトネスと言えるのに対し、第三者への敬意を示す素材敬語については、その使用を動機づけているものは神や天皇への不可侵を原点とする上位者への畏怖であり、対面・非対面にかかわらず使用され、敬意の対象人物に対して何の働きかけも調整も行わないから対人的調整機能であるポライトネスとは無関係である。むしろ、B&Lの理論がゴフマンを介して基礎理論として援用しているデュルケームの宗教儀礼の理論の方が素材敬語の説明原理となる。その点を確認したうえで現代日本における敬語使用の最新の様相について考察したい。

2. デュルケーム、ゴフマン、ブラウンとレヴィンソン

B&Lのポライトネスの理論体系の鍵概念となっているフェイス(face)は、デュルケームの宗教儀礼の研究とそれを応用したゴフマンのフェイス理論を援用している。ここでデュルケームとゴフマンの理論からB&Lへの影響関係について確認しておきたい。

デュルケームはオーストラリアの先住民(アボリジニ)の宗教観を調査し、人が聖なる対象に対して二通りの態度を取ることを記述した。その一つは聖なるもの(le sacré)に近づかずに距離を置こうとする①消極的儀礼(rite négatif)であり、もう一つは聖なるものに近づいて親愛の情を示す②積極的儀礼(rite positif)であった(Durkheim 1912)。

デュルケームが論じた聖なる対象への一方向の宗教儀礼を双方向の対人コミュニケーションへと応用したのがゴフマンのフェイスの理論だった。ゴフマンは、人が他者と出会うたびに自己自身の社会的価値を示し、保持しようとするとし、その価値のことをフェイス(face)と呼んだ。人のフェイスは聖なるもの(sacred thing)であり、他者と距離を取ってそのフェイスを侵さない態度を①回避儀礼(avoidance ritual)、他者に関心を持ってそのフェイスに積極的に関わろうとする態度を②提示儀礼(presentational ritual)とした(Goffman 1967)。人のフェイスの聖性は神の聖性とは違って誇り(pride)、名誉(honor)、尊厳(dignity)といった人間的な要素として表れる。そして、自己のフェイスの自覚を自尊心(self-respect)と言い、他者のフェイスへの思いやりを配慮(considerateness)と言う。ゴフマンはポライトネスに相当する語句として配慮という言葉を用いていた(Goffman

1967: 10) .

デュルケームとゴフマンの理論の質的な異なりには注目しておく必要がある。宗教的な聖なる対象と人との関係は対立的で非対称的で①消極的儀礼が基本であり、自分自身の俗を消し去って聖なる領域に入った者のみが②積極的儀礼を許された。これに対して人どうしの対人コミュニケーションは対等で対称的である。自己と他者は鏡像関係で、自己も他者も同じフェイスを持つと想定される一種の相互主観性がそこにはある。ゆえに自己と他者との関係は人と神とのような絶対的關係ではなく、自己から見た他者も、その他者側から見ればその人が自己でこちらが他者となるような相対的關係である。だから自分のフェイスを相手に置き換える配慮という行為がそこで発生する。

ポライトネス理論もゴフマンと同様に相互的な対人コミュニケーションを対象とするが、B&Lはゴフマンが儀礼（外的態度）として記述したフェイスを言語コミュニケーション上の他者との間に生じる内的欲求として概念化した。即ちゴフマンの①回避儀礼は、他者に自己の領域を侵されたくない欲求である①ネガティブ・フェイス（negative face）として、同じく②提示儀礼は、他者に受け入れられたい欲求である②ポジティブ・フェイス（positive face）として読み替えたのである（B&L 1987）。以上の3者の関係をまとめたのが表1である。

表1 デュルケーム、ゴフマン、B&L の比較

文献	行動を動機づけるもの	遠向行動	近向行動	行動の対象／方向
Durkeim 1912	宗教儀礼	消極的儀礼 (rite négatif)	積極的儀礼 (rite positif)	聖なるもの (le sacré) ／一方向
Goffman 1967	フェイス (face) への配慮 (considerateness)	回避儀礼 (avoidance ritual)	提示儀礼 (presentational ritual)	対人コミュニケーション における他者／双方向
B&L 1987	フェイス侵害を補償する ポライトネス (politeness)	ネガティブポライトネス (negative politeness)	ポジティブポライトネス (positive politeness)	対人コミュニケーション における他者／双方向

3. 日本語の敬語の背景にある時代の変遷

非対面の上位者に対してまで敬意を示す日本語の素材敬語の原点には宗教的な背景があると考えられている。(1)は松村明編（1971）からの引用である。

(1)敬語は本来神や天皇など畏敬すべき対象についての「ほめことば」ないし、それについての直叙を恐れた「避け言葉」に発したものである。上代になると絶対敬語としての自称敬語があり、神や天皇が自らに敬語を用いている（記紀の歌謡、万葉集）。平安時代の貴族社会では身分階級に応ずる敬語の段階制を発達させ、二重敬語、謙譲語の発達、対話敬語「侍り」の発生がある。鎌倉時代になると、男性中心の敬語が発達し、室町時代には身分差よりも優劣意識に重点を置いた使用、そして対者敬語「候ふ」が注目される。江戸時代後半に「おなる」形式「おいたす」丁寧語「です」の現代的用法が生まれた。

これによると日本語の敬語は、上代における神や天皇など畏敬すべき対象についての「ほめことば」や「避け言葉」に発する絶対敬語（天皇の自称敬語を含む）を発祥としており、宗教儀礼を論じたデュルケームの理論における消極的儀礼に相当するものである。神（天皇）は人間と対等ではなく、常に眼前の聴者ではない第三者の位置にあった。それが平安時代には貴族社会の身分階級に応じた直接的な対人関係へと拡張し、上下関係を反映した相対敬語へと変質した。ここでは絶対敬語も相対敬語も依然として素材敬語の域を出ない。それと同時に対者敬語「侍り」がこの時期に発生し、相手にその地位を尊重する意識を伝えるネガティブ・ポライトネスが出現したと位置づけることができる。そして、鎌倉時代、江戸時代と時代が下る間も、素材敬語は武家社会での上位者への敬語として維持されつつも対者敬語が徐々に発達し、江戸時代後半には現代語の丁寧語「です」の萌芽も見られた。この間、近代までの日本語の敬語使用は縦社会での上下関係を基本とするネガティブ・ポライトネスとして発達した。以上をまとめたのが表2である。

表2 日本の各時代と敬語の変遷

時代	社会	素材敬語（一方向敬語）	対象	対者敬語（双方向敬語）	対象
上代	律令制度	絶対敬語（自称敬語含む）	天皇、神		
中古	貴族社会	神に代わる上位者への畏敬	身分上位者	丁寧語「侍り」	身分上位者
中世	武家社会	他者への優劣意識	身分上位者	丁寧語「候ふ」	身分上位者、優位者
近世	封建社会	尊敬語、謙譲語の体系化	身分上位者	丁寧語「です」の萌芽	身分上位者、優位者
近現代	近代社会	尊敬語、謙譲語の定着	身分上位者	丁寧語「です」の定着	身分上位者、優位者
		↓		↓	
		一方向の消極的儀礼		ネガティブポライトネス	

4. 現代の敬語とポライトネス

一方、近代市民社会は西洋的な個人主義が確立した平等社会である。社会構造の変化はそこで求められるポライトネス機能の変化をもたらし、結果として敬語使用の様相にも変化が見られる。今日の社会ではこの伝統的な敬語観よりもポライトネスの意識が優位に作用する現象が種々見られるようになった。

例えば、「1番線に列車がまいります」のように謙譲語を聴者への対者敬語（ネガティブ・ポライトネス）として使用する現象は丁寧語として既に知られている。逆に、上位者が下位者に「今度遊びにいらっしゃいよ」と尊敬語を聴者への対者敬語（ポジティブ・ポライトネス）として用いる表現もある。さらに非対面の上位者に対する素材敬語は使われなくなる傾向が見られる。例えば、学生どうしの会話では「先生が来たよ」のように尊敬語を用いず、教授に対しては「先生がいらっしゃって嬉しいです」のように使い分ける若者が増えている。

以上を総括すると、尊敬語や謙譲語といった素材敬語の語彙を対人コミュニケーションにおけるポライトネス・ストラテジーのツールにおける対者敬語として利用する傾向性が高まり、日本語の敬語体系に変化が生じているのではないかと考えられる。

【参考文献】

- Brown, P. and S. Levinson (1987) *Politeness: Some universals in language usage*, Cambridge University Press.
 Durkheim, É. (1912) *Les formes élémentaires de la vie religieuse: le système totémique en Australie*. Félix Alcan.
 Goffman, E. (1967) *Interaction Ritual*, Pantheon Books.
 松村明編 (1971). 『日本文法大辞典』 東京堂書店
 小野正樹・山岡政紀 (2025 予定). 「日本語の配慮表現」 山岡政紀他編『世界の配慮表現』 ひつじ書房

話題提供 3. 社会学の観点からフェイスとポライトネス理論を考える。

フェイスの社会学へー現代社会と B & L のポライトネス理論ー

阪本俊生（南山大学）

他人と相互行為する際、私たちは常に、なにがしか自分自身のフェイスをもって参加している。これが Goffman 社会学の基本的スタンスである。では、フェイスをもたないとどうなるのだろうか。自らのフェイスを失った状態では、社会的相互行為はきわめて困難に陥る。そして、このことは、そもそも人間にとって社会というものがいかに可能か、という話に直結している。

たとえば、学校の教室を考えてみよう。教室で授業がおこなわれているとき、教師は、自らが教師である、というフェイスを維持することで、はじめて授業という社会的相互行為の場面も保たれる。生徒たちは、教師を教師として認めるような態度、すなわちポライトネスの態度をとることによって、教師は自らのフェイスを維持

し、授業という社会的相互行為は維持される。教師と生徒たちによる、いわばフェイス保護の共謀関係によって、教室での授業という相互行為場面は成り立っている。

しかし、生徒たちが教師のフェイスを無視し、それを壊すような言動をするようになるとき、この社会状況の維持は困難をきたす。たとえば、生徒たちが教師の指示を無視し、授業中に教室内を歩き回ったり、教師に背を向けて座ったり、生徒同士の私語を大声で続けたり等々である。これは以前、日本で社会問題となった学級崩壊という現象である。だが、これが問題化するよりもはるか以前、私は、1人の生徒が理科の教師に対して、授業内容が、現代の科学の知見からは間違っている、という指摘を授業内で繰り返しおこなうのを経験したことがある。教師は教科書通り教えているのだが、この生徒は、それが間違っているという。教師はとても困惑し、授業維持はかなり困難なものとなった。ポライトネス論では、Bald on record となるのであろう。これもまた生徒による、教師のフェイスの破壊行為の1つであり、教師のフェイスだけでなく、教室での授業の社会空間もまた危ういものとなっていた。

些細な例とはいえ、これは実際の社会崩壊の現場の事例である。もちろん、これと同様の話は、学校の教室に限らない。内容は違っていても、想像力を働かせば、フェイス破壊による相互行為の混乱の例は、日常的に起こっている、その意味でありふれたできごとではあるのだが、通常、これらはあるにふれているがゆえに、問題化しづらい。そして、このようなできごとは、当事者の人びとにとって深刻なだけでなく、社会全体にとっての大きな問題の、見えざる原因である可能性すらある。

社会とは、実際には、このような日々の社会状況の集積である。したがって、フェイスがいかに可能か、あるいは社会状況の現場における相互行為秩序がいかに可能か、というミクロな視点からの問題は、社会はいかに可能か、というテーマと直結しているといっても過言ではない。そして、互いのフェイス維持に不可欠な儀礼的ふるまいや言動が、私たちの社会行動において、さまざまなかたちで観察されることを Goffman は明らかにしつつ分析した。そして、それらを詳細かつ綿密に分析するための理論として組み立て、展開したのが B & L のポライトネス論だといえよう。

フェイスをめぐる相互行為研究が、社会構造や組織、制度等のマクロの視点とどう関わるのか。Goffman 自身はやや否定的であったが、B & L もいうように、Giddens の、ミクロな視点からの研究とマクロな視点からの研究とは関連づけられる、という指摘は重要であり、B & L の分析視点は、これに寄与する試みとして興味深い。

個々人のフェイス保持で社会的相互行為が可能になるというのは、特定の文化に限られない。このこと自体は、あらゆる人間社会に共通で、いわば普遍的なものだ。そのため Goffman の相互行為研究は、アメリカの事例や観察に基づきつつも、他の多くの文化の事例や小説も織り交ぜている。Goffman の著書をいくつも翻訳された、石黒毅氏(故人)は、かつて Goffman の魅力の一つは日本人がもつような恥の感覚を描き出しているところだといっておられた。Goffman が、特にフェイス論を展開しているのは、儀礼的相互行為研究においてである (Goffman, 1967)。これは Durkheim が宗教論で書いた近代個人の宗教性の実証を目指すものだとして Goffman 自身述べている。Durkheim のこの研究は、非近代・非西欧の宗教の文化人類学的研究を用いた社会学理論研究であった (Durkheim, 1912)。

Goffman のフェイスは、一般に体面やメンツ(面子)と訳されてきた。だがこれらの語には、日本文化特有のニュアンスや含みがある。その一方で、Goffman は、フェイスをアメリカ社会やそれ以外の文化圏の相互作用分析にも見ている。そのため、フェイスを特定文化的でなく、汎文化的で普遍的な概念とする B & L の捉え方は妥当である。逆にフェイスを体面やメンツとしてしまうとその本質を見誤る可能性もある。

フェイス重視の度合いは文化によって異なり、日本人は、西欧人よりもフェイスを、より重視する傾向がある、といった比較研究もあるが、これはフェイス概念の誤解による。フェイスそのものは普遍的だが、それを維持したり保護したりするための方法、あるいはやり方にはバリエーションがある、とするのが適切だろう。つまり、フェイスは汎文化的重要性の観点から捉え直されるべきであり、同様のことは、フェイス保護あるいは保持とかかわる態度やしぐさ、行動や言語表現の仕方のポライトネスにもいえよう。

筆者は、これまで Goffman 社会学の応用から、プライバシー意識や自殺の社会学研究をおこなってきた。これらはいずれもフェイスやポライトネスとかかわっている。プライバシー意識は、個々人における自分自身のフェイス保持だけでなく、他人のフェイスを保護するための配慮とも深く関わっている。たとえば、私生活情報の暴露は、しばしばスキャンダルとなり、個人のフェイスを脅かす。しかし、フェイスとプライバシーとの関係は、もっと些細で身近なところにもある。たとえば、プライベートな部屋を訪れる際の部屋のドアのノックは、相手のプライバシーへの配慮を示す一般的な慣習の一つとされてきた。ノックは、しばしばプライバシー論に

において取り上げられてきたが、欧米では一般に親密な関係においてすら必要とされている。そして、これは不用意にドアを開けることで、私室にいる個人のフェイスを壊さないための行動でもある。私室にいる人は、さまざまなプライベートなおこなっていることもあり、他人に不用意にドアを開けられると当惑する可能性があるからだ(ネガティブ・ポライトネス)。このように、ノックは相手のフェイスに対する配慮であるが、同時にノックする側が、自分は相手のプライバシーを侵すような人間ではない、ということを示すノックする側の自己提示でもある(ポジティブ・ポライトネス)。こうした配慮行動は、相手の側のネガティブ・フェイスへの対応といえる。だがこれは、ノックする側にとっては、相手との親密さや円滑な人間関係を維持するための戦略という観点からとらえるとポジティブである。

20 世紀のプライバシー論では、社会関係の親密さの重要性が強調されてきた。プライバシーが社会に後ろ向きでネガティブな概念だという批判に対し、プライバシー論者たちは、プライバシーが近代社会において重要な親密さの社会関係をもたらすという点で、積極的な社会的意味をもつと反論した。だがその一方で、社会関係の親密さとフェイスとはある種の緊張もはらんでいる。「親しき仲にも礼儀あり」といった言葉があるが、フェイスと親密さをどのように調整すべきなのか。親しいと思っている相手でも、空間においても、そして会話においても、相手の領域にどこまで踏み込んでよいのか。ノックの慣習は、このようなジレンマ調整に関わる一つの例ともいえる。親子関係でも、一定年齢に達した子どもたちは、自室に来る親にノックを求める。一般に、ノックは、相手のフェイスを配慮しつつも、相手の領域に踏み込んでいくという両義性を持つ。会話においても、人びとは相手の心の扉を慎重にノックしつつ相手との親しさの距離をつめていくことが求められているといえる。こうしたプロセスは、ネガティブであると同時にポジティブでもある。

ところで、私たちは通常、誰か他人と(それがたとえ親しい人であったとしても)会う際は、相手に合わせた外見やふるまいの準備、あるいは心の態度が必要だと感じている。個人の側の相手と接するのにふさわしいフェイス(これは単に、いわゆるフェイス＝顔だけを意味するのではない、いわば社会的表象としての含意がある)をつくること、そのために他人と一定の距離を保つ必要があると考えている(ネガティブ・ポライトネス)。そして、これに対する相手の側からの配慮もまたポライトネスの一つであり(ポジティブ・ポライトネス)、これによって互いのフェイスが守られる。ここにあるのは、プライバシーという近代に広まった意識と、フェイスやポライトネスとの深い関わり的一端だ。

プライバシー意識は近代化の中で高まってきた。近代初期の思想には、プライバシーへの言及はほとんどないとされている。あるいは、法律も 19 世紀末によくアメリカの法学者たちによって提唱され、20 世紀初頭にその原型となるものができた。近代以降のプライバシー意識の高まりの背景にあるのは、Goffman が指摘したような、近代人特有のフェイスの脆弱性による、と私は考えている。近代における個人のフェイスの脆弱性の高まりといった変化について、Goffman は指摘していない。だが、近代人におけるフェイスの脆弱性それ自体は、Goffman がフェイスを論じた際の出発点ともいえる、Durkheim のいう、近代特有の人格崇拜論にかかわっている。すなわち、近代化とともに生じてきた個人の聖化を、社会的相互行為の観察を通じて実証するという目的をもつ Goffman の研究から生まれたのがフェイス概念であった。

個人主義化が進むにつれ、個々人は自らのフェイスを個人自身で支えねばならなくなる。近代以前、人びとのフェイスそのものは身分や家柄、階級などによって、いわば制度的の支えをもつ、(少なくとも)近代よりは盤石なものであったといえよう。ポライトネスも制度や規範で規定されていたであろう。しかし、近代社会では、個々人は自分のフェイスを自らつくり、その正当性も自ら保証し続ける必要がある。その心理的側面は個性やアイデンティティと呼ばれるが、それらの社会的側面、社会的承認は、相互行為する他者による自らのフェイスの承認の是非にかかっている。そのため、個人は前近代にもまして、私生活の暴露やスキャンダルを恐れなければなくなり、そのフェイスは、些細なできごとの発覚によってすら失われかねないと感じ、さらに相互行為における他者の態度にきわめて敏感にもならざるをえない。また、フェイスは悪意のある他人によって容易に壊されることすらある。これについて Goffman は次のように言う。

個人が正しい生活を送っていると他者が感じているということを、その個人が確言することのできる理由は、彼が正しいからではない。彼を不信にさすために情報を組み立てるよう動機づけられている人がだれもいないということである。(Goffman 1974)

このように自らのフェイスへの制度的下支えを撤廃することで、近代の個人は自由になった。だがその反面、

他者からの情報の組み立てに対してきわめて脆弱になったといえる。そこにプライバシーが必要とされる契機がある。

そして、こうした近代特有のフェイスの脆弱性は、現代ではさらに高まってきている。社会組織の安定性や影響力は弱まる一方、個人化の度合いが強まっているからだ。現在、人びとは以前にも増して、自らのフェイスが脆弱になるとともに、それへの脅威に対してより敏感になりつつある。これは今日の、人権擁護重視の傾向にも表れている。同時に、個々人に対するポライトネスも、以前よりも強く求められるようになり、他者へのポライトネスは、実際上も、そして学問的テーマとしての重要性も増してきていると考えられる。たとえば、ハラスメント問題への関心の高まりやその広がりである。セクハラやパワハラから始まり、いま話題のカスタマー・ハラスメント、いわゆるカスハラへと広がりつつある流れはその実際の表れである。

では、個人にとって、自らのフェイスを失うこと(フェイス・ロス)とはいかなることか。これはしばしば、法的な見方からは人権侵害として、医学の観点からは精神的障害の原因として、そして心理学的観点からは、心の傷つきがもたらす諸問題としてとらえられるのであろう。だが社会学的には、これは、個人にとっての、社会そのものの喪失といえる事態である。フェイスを失い、他者からのポライトネスを事実上失ってしまうということは、個人にとっての社会の喪失に他ならない。なぜなら、人は何らかのフェイスがあつてこそ、社会への参加も可能になるからだ。人は社会とのつながりを失ったり、弱まったりするとき自殺へと導かれやすくなるというのがDurkheimの『自殺論』であつた。そして、1990年代後半の日本における、中高年男性を中心とする自殺率の急上昇の背景には、彼らにおけるフェイスの喪失が突如として起こったことに起因していると考えている。

このようにフェイスおよびポライトネスは、社会の相互行為の現場において観察され、しかも社会そのものの根幹と関わっていると考えている。このことを踏まえたうえで、今回は、ポライトネスにかかわるテーマの一つとして、福祉の現場の問題に着目する報告を試みたい。すなわち、今日の日本では生活保護受給者の自殺率の高さが指摘されている。かつての厚生労働省の調査によると、これは自殺率全般の2倍以上である。本報告では、このような事態の背景にある福祉の問題について、フェイスおよびポライトネス論の観点から当事者たちの相互行為を通じての考察を示す。そして、これを通じて、ポライトネス論の社会的な意味の視角を紹介したい。

【参考文献】

- Brown, P. and Levinson, S. (1987). *Politeness*. Cambridge University Press.
- Durkheim, E. (1912). *Les Formes elementares de la Vie religieuse*, Le Systeme totemique en Australie.
(『宗教生活の原初形態』古野清人訳 岩波書店 1941年)
- Giddens, Anthony (1987). *Social theory and modern sociology*, Blackwell (アンソニー・ギデンズ 社会理論と現代社会学 藤田弘夫監訳 青木書店 1998年)
- Goffman, E. (1967). *Interaction Ritual*, Anchor Books (ゴッフマン. 儀礼としての相互行為』 広瀬英彦・安江孝司訳 法政大学出版局 1986年)
- Goffman, E., *Frame Analysis*, Harper, 1974.
- 宇佐美まゆみ(2024). ポライトネス理論：発話行為から談話へ 大修館書店.
- 阪本俊生(1999). プライバシーのドラマトウロジー 世界思想社.
- 大村英昭・阪本俊生編著(2020). 新自殺論 青弓社.